

鷗外・史伝小説論序説

山崎一穎

(序)

鷗外の歴史小説の世界が、乃木殉死というエポックな事件に触発されて生まれたように、晩年の史伝小説の世界も、自からの引退というドラマの中で拓かれていったのである。勿論、鷗外には『後光明天皇論』(明二四・三)、『ロオベルト・コッホが伝』(明二四・七・八)、『西周伝』(明三二・一一)、『ゲルハルト・ハウプトマン』(明三九・一〇)、『能久親王事蹟』(明四一・六)、『ギョオテ伝』(大ニ・一一)等の考証、伝記があり、その客観的、科学的な視座は晩年の史伝の先駆をなしている。しかし、対象を追求する作家の姿勢と方法に於いて、一線を画されるべきである。晩年の史伝小説は、あくまでも内発的に生み出されたものである。本論考の主眼は晩年の史伝小説の検討であるが、その史伝小説のスタイルの萌芽は、『津下四郎左衛門』(大四・四)に見られ、それは『渋江抽斎』(大五・一～五)に至って完成を見る事になる。(注1)しかし、両作品の間に『梶原品』(大五・一)という作品があって、この作品の位相を明確にしない限り、史伝小説を全円的に把握する事が出来ない。

本論考では、この『梶原品』の位置付けから初め、『渋江抽斎』以下の史伝小説の主題と方法を解明したい。そして、鷗外は史伝小説を完成する事によって、何を認識し、それが、晩年の生とどう関わって来るのであろうか、という命題に解答を与えたい。

(一)

『梶原品』を論ずるにあたって、まず私の感じた疑問点から入りたい。『梶原品』に於いて、

私は品川に於ける綱宗を主人公にして一つの物語を書かうと思つて、余程久しい間、其結構を工夫してゐた。(傍点筆者)

と述べ、更に文末で

私は此伊達騒動を傍看してゐる綱宗を書かうと思つた。外に向つて発動する力を全く絶たれて、純客観的に傍看しなくてはならなかつた綱宗の心理状態が、私の興味を誘つたのである。私は其周囲にみやびやかにおとなしい初子と、伶俐で気骨のあるらしい品とをあらせて、此三角関係の間に静中の動を成り立たせようと思つた。(傍点筆者)

と語っている。私の疑問の第一は、前文の「余程久しい間」という所に

ある。一体鷗外はいつ頃からこの構想を持ったのであろうか。また、そのような思いに何故駆られたのであろうか。次の疑問は、両文に共通して見られる「綱宗を書かうと思」う所期の目的が達成されずに、何故に小説が『梶原品』と題されたのであろうか。この二点がこの小説を読んだ、私には気に掛かるのである。

『梶原品』執筆にあたって、鷗外の用いた材原は大槻文彦『伊達騒動実録』（乾坤二冊、明四二・一一）であるから、「余程久しい間」と言っても、一応明治四二年以前とは考えにくい。手掛りとなるとしたら、小説中に「去年五月五日に、仙台新寺小路勝寺にある初子の墓に詣でた。」とある一文のみである。日記によると、大正四年十一月二十九日（月）。「梶原品を草し畢る。」とあるから、「去年五月五日」は大正三年五月五日」である。この事は『北遊記』（大三・八・九）によれば、大正三年五月四日、軍隊衛生視察のため上野を出発し、当日仙台に着き、五日午後「歩兵第四聯隊營を觀る。後新寺小路勝寺三沢光子（トウ）の墓に往く。」とある事によって確認出来る。更に注意したい事は、『北遊記』の五月七日の午後「栗山大膳の墓と稱するものを訪ふ。墓石と巨碑とあり。墓石には涼岸良照禪定門云々と刻す。巨碑は字細く苔に掩はれて読むべからず。」とある事である。因に『栗山大膳』は、大正三年八月十二日に脱稿され、九月の「太陽」に掲載され、『北遊記』は、大正三年八・九月の「心の花」に掲載されている。私は『栗山大膳』執筆は、五月の衛生視察の折に胚胎したものと推測したい。更に『梶原品』もこの時、鷗外の心中に蔭を落したと考えたい。そのように考えるならば、「余程久しい間」とは、少くとも大正三年五月以降と押えて大過なからうと思ふ。

とすると、『栗山大膳』と『梶原品』との関係はどうなるのであろうか。『栗山大膳』について、鷗外は『歴史其儘と歴史離れ』（大四・一）に於いて、

『栗山大膳』は、わたくしのすぐれなかつた健康と忙しかつた境界とのために、殆ど単に筋書をしたのみの物になつてゐる。そこでそれを太陽の某記者にわたす時、小説欄に入れずに、雑録様のものに交ぜて出して貰ひたいと云つた。

と語っているが、『栗山大膳』も『梶原品』も史伝小説集『山房札記』（大八・一二）に収録されている。私は『栗山大膳』が何故に史伝小説なのか、その理由を詳らかに出来ないのを残念に思う。少くともスタイルから言つて、歴史小説だと見てよいと考えている。唯一の手掛りとして、清田文武氏が『栗山大膳』について、「鷗外は、ひとりの人間として見切りの精神の発現せる人物に興味を示したに相違ない。」と述べ、更に、それを鷗外が「小倉時代」に学んだ事を指摘している。（注2）この清田氏の考え方を援用すると、『梶原品』に於いて、「外に向つて発動する力を全く絶たれて、純客観的に傍着しなくてはならなかつた綱宗の心理状態」に興味を引かれ、「此人が政治の上に發揮することの出来なかつた精力を、芸術の方面に傾注したのを面白く思ふ。面白いのはここに止まらない。綱宗は籠居のために意気を挫かれずにあつた。」ことに共感を覚えている鷗外の心情は、まさに小倉時代のそれにオーバーラップして来るであろう。少くとも、『栗山大膳』と『梶原品』との関係は、共通の心理状況の裡にある事を指摘しておきたい。それ故に、「余程久しい間」を先程大正三年五月以降と押えたが、それは、明治三十二年六

月から三十五年三月までの小倉左遷の時期を陰影に持っていると考えた
い。

次に「綱宗を書かうと思った。」と言いながら、作品が『梶原品』とな
ったのは何故であろうか。鷗外は自から綱宗の妾「品は一体どんな女で
あつたか。」と問い、豪邁な気象の綱宗に晩年まで寵愛された品は、「恐
らくは尋常の女ではなかつただろう。」と見ている。更に「初子が嫡男
まで生んでゐる所へ。側から入つて来た品が、綱宗の寵を得たには、両
性問題は容易く理を以て推すべからざるものだと云ひながら、品の人
物に何か特別なアトラクションがなくては慥はぬやうである。」と言ひ、
そして「私は豪邁の気象を以て不幸の境遇に耐へてゐた嘉心（綱宗入道
嘉心、注筆者）を慰めた品を、音誠実であつたのみでなく、気骨のあ
る女丈夫であつたやうに想像することを禁じ得ない。」とも言っている。
綱宗については、先の引用文の他は出ない。これだけの材料では、「綱
宗を書かうと思つた」所期の目的から『梶原品』に変わった理由を説明
出来ない。私は（序）に於いて、鷗外の史伝は引退というドラマの中で生
み出された事を述べた。今、この辺から論を展開させたい。鷗外日記に
よると、

△大正四年V

九月 十六日 婦女通信予が引退の報を伝ふ。東京諸新聞の記者
悉く来訪す。中に神近市子あり。前に泊夫藍の同
人たりしに、今東京日日新聞の記者たりと云ふ。
十七日 最後の一句を草し畢る。

十一月 一日

去^ル故^キ

鷗外・史伝小説論序説

去^ル故^キ如^ク遺^シ迹^ニ。就^テ新^シ同^レ救^レ焚^ヲ。紅^シ顔^ノ人^易起^ル
老^イ。白^ク首^ニ意^ハ何^カ云^フ。已^ニ悔^ミ琴^心挑^ル。寧^ク期^シ岐^路分^ル。
未^ダ聞^カ司^馬氏^ヲ。將^テ子^ノ累^ニ。文^君一^ヲ。（訓読筆者）

十日 即位式に列す。

十四日 大嘗祭に列す。

十九日 盛儀私記を草し畢る。

二十二日 次官大嶋健一に引退の事を言ふ。石黒忠恵来話
す。

二十三日 賀古鶴所に大嶋に辞意を告げしことを言ひ遣る。

二十四日 鶴田楨次郎に告ぐる所あり。夜賀古鶴所来話す。

二十六日 大嶋次官に引退時の衛生部人員異動の事を言ふ。

二十九日 梶原品を草し畢る。

三十日 諸軍医部長、部員来見す。岡大臣將に大磯に往き
て病を養はむとす。往きて見ゆ。予に暫留を求む。

△大正五年V

四月 十三日

補任課の電話更迭の辞令出でたりと報ず。乃ち起
ちて衆に告別し、新局長鶴田楨次郎に医務局長所
管の鍵を交付す。山県公有朋、寺内伯正毅、岡市
之助に電報す。陸軍省に往き、大臣大嶋健一の手
より辞令を受け、次官局長に告別す。大臣官邸に
刺を通ず。参謀本部諸官に告別す。石黒男忠恵の
家に刺を通ず。

以上の如くである。この引退に関して唐木順三氏は、大正四年七月十八

日の七言律詩「齟齬」の一句「老来殊覺官情薄」や「回頭」と題する七言絶句、『渋江抽斎』の冒頭の述志を踏えて、「医務局長森林太郎が周囲から引退をせまられ、心ならずもそれにしたがわざるをえない勢いに追いこまれていった」時、「不平と焦慮と寂莫のがれるために、いちずに、ひたむきに抽斎像の造型に突進んでいったのである。」(注3)と述べている。この唐木説に対して、平岡敏夫氏は、鷗外の退官が強制ではなく、自からの発意であった事を、医務局長在任期間の慣例や、森於菟氏の直話から立証し、大正四年九月十七日の「読売新聞」の鷗外談話を引いてもいる。そして、「鷗外の深くシンパシイを感じる抽斎にむかっ

てのこの熱っぽい追求は、過去三十五年間の鷗外の△不幸▽なあり方をエネルギーとしていたのだと考えたいのである。詩や作品にほの見える鬱憤めいた句は底流の上にかぶ泡にすぎない。」(注4)と反論を加えている。三好行雄氏は唐木、平岡説を踏えた上で、「鷗外に引退の意志があつたのは事実だろう。しかし、△寝耳に水―平岡氏の引用した読売新聞の談話中の一句―注記筆者―▽の噂を伝えられたとき、鷗外の心情はなお平然とありえたか。引退の意志があつたこと、にもかかわらず、自己のあざかり知らぬところで進退が取沙汰されることとはなお別である。心情のひずみにすぎぬといってしまうばそれまでだが、文学とはつねにそうした心情の劇でもあつたはずだ。」と言ひ、「みみっちい怨念を生の実質にまで拡大してゆくところに、文学というもの、作家というものの秘密があると思うからである。」(注5)と述べている。その後三好行雄氏の推論を裏付けるような資料が発見されたことは周知の事実である。すなわち、大正四年十二月五日付の賀古鶴所から鷗外宛書簡が

それに該当する。それを見ると、かつて鷗外が辞表まで出して守り抜いた衛生部の人事権を、再び師団長の権限に移管する動きが出て来たこと、岡市之助陸軍大臣は、「森がいふコトを聞かずに引かば其あとハ直ちに鶴田にやらずに一寸と芳賀(朝鮮総督府陸軍々医総監芳賀栄次郎―筆者注記)を位に置いて此件を解決せしめやうといふ意ハ明であります、大臣としてハ余に小巧を弄し過ぎると思ひます、老公曰く岡といふやつハそんな事をやるやつだ、……ドウいふ事があつてソウいふわけのわからぬ事を仕やうとするのであらうか何か裏に事情がありハせまいか」(注6)と報じている。やはり、引退の覚悟を決めていたにしても、不安や焦燥感があつたと言えよう。平岡氏の引用した「読売新聞」(大正四年九月十七日付)に、「今秋の御大典を機として現職を勇退し悠々閑地に就いて専ら文芸の人たらんといふ噂がある」と云うように、少くとも鷗外は、引退の時期を十一月十日の大正天皇即位式後と決めていたように思う。乃木大将が明治天皇の大葬の日に殉じたように、鷗外の心中でも官人としての区切りを、即位式に定めていたように思われる。しかしながら、新聞報道が早く出てしまった事や、それに伴って人事のごたごたが絡まって安穩な日々でなかつた事も想像に難くない。先に引用した三好行雄氏の論の中に、「みみっちい怨念を生の実質まで拡大してゆく」鷗外の覚悟がほぼ定まって来たのは、十一月に入ってからだったろう。すなわち、十一月一日の「去故」と題された漢詩に託された、鷗外の心中をその証とした。い。「紅顔の人老い易く、白首意何をか云はむ。已に悔ゆ琴心もて挑みしを、寧ぞ期せん岐路の分たんことを」に見られる如く、自分の懂れるものを求めた事を後悔している。それは、若き日

官界に足を踏み入れ、その中で汲々として俗事に関わって来た鷗外の悔恨の情であつたらう。そして、尾聯の司馬相如が二人の子供を以て、卓文君の心をつなぎ止めようとしたなどは聞いていないと言う所に、鷗外の決意が読み取れよう。

「余程久しい間」綱宗を書こうと思っていた心が具体的に形を取り初めたのは、少くとも『最後の一句』を書きあげた直後でなからうか。引退の報と小倉時代の苦い思いと、綱宗の蟄居生活とが重なりあつて、内心の劇が展開されていたのであろう。鷗外の心情と綱宗の心情とは近似していた筈である。しかし、すでに渋江抽斎の探索が始まっている事に注意したい。大正四年八月十四日「中村範、(弘前)幣原担、(広嶋)柏村保、(弘前)に書を遣る」に初まつて、三十一日には飯田巽を訪れ、渋江氏の後である杵家勝久の事を聞かされている。十月に入ると、渋江保との書簡の往復が頻繁となり、十一月二日「渋江保始めて至る」とある。引退に絡まつて生じた寂寥感や焦燥感がある反面、それを越えて生きようとする決意も萌し始めていた事も事実である。この両者の葛藤が、即位式が近づくにつれて、徐々に平靜になつて来たものではなからうか。すでに見た「去故」などに、その決意が読み取れよう。それは抽斎を追う心情とも類似している。かくの如き心情が、「外に向つて発動する力を全く絶たれて、純客観的に傍着しなくてはならなかつた綱宗の心理状態」から離れて、むしろ「気骨のある女丈夫」であり、「恐らくは尋常の女ではなかつた」であらう梶原品に、心が傾斜していったのは当然である。品は抽斎や五百と同一円周上に位置している筈である。引退を境として、鷗外の心情の変化に伴つて、△綱宗▽から△品▽に変化し

ていたのである。

以上考察して来たように、小説『梶原品』は一種揆じれを持つている事は否めない。しかも、小説中に於いて、「私」が顔を出し、創作過程を語る形をとっている。はては、綱宗と初子と品とを合わせて、「此三角関係の間に静中の動を成り立たせようと思つた。しかし私は創造力の不足と平生の歴史を尊重する習慣とに妨げられて、此企を抛棄してしまつた。」と告白している。勿論抛棄の理由は謙譲に過ぎないとしても、歴史小説とも史伝小説ともつかない、随筆風の小説にどのような意味付けをしたらよいのであろうか。重松泰雄氏は、「△品▽の中の伝記的部分はやはり△頭在せぬ創作▽△小説▽として認め」たいと言ひ、「肝心の作品を伴わない縁起」であり、「一種の△ゼロ記号▽によって示されるような形」(注7)をとっていると述べている。まさに、この重松氏の見解は動かない所である。ただ私なりに確認して置きたい事は、『梶原品』は引退に絡まるドラマから、鷗外の今後の依つて立つ決意を表明した作品であると思う。つまり、史伝小説家としての自己定立の表明であると考へたい。しかも、『津下四郎左門』で史伝小説の△技▽を定め、た鷗外は、『梶原品』によつて、△心▽を定めたと考へたい。史伝小説『津下四郎左衛門』が△体▽ならば、『梶原品』は△用▽である。(一応『栗山大膳』も含めておきたい)そして、この△体▽と△用▽とが止揚された所に『渋江抽斎』が成立するのである。

(二)

史伝小説の主題と方法を論ずるにあつて、当然『渋江抽斎』から論じ

なければならぬが、かつて論じたことがあるので重複を避けたい。
 (注8) ここでは鷗外の筆が抽斎を追求しつつ、抽斎没後にも及び、その遺族、抽斎の妻五百没後の遺族達の形成する渋江家の生活圏を経系とし、抽斎の師、先輩、知友の生活圏を横糸として、それらの連鎖の中に人間群像を浮彫りにしている事を確認して置きたい。更に全体の構成が次のようになってゐる。

- 一 抽斎の人とその学問……………一章～六四章
- 二 抽斎没後の遺族(中心五百)……………六五章～一〇七章
- 三 五百没後の遺族(中心保、勝久)……………一〇八章～一一九章

すなわち、抽斎、五百、保(勝久)を中心としつつ、そこに生きる人達の生活を見据えている。稲垣達郎先生は、特に抽斎没後に比重を置いて構成されていると見、その理由を、「五百の肖像は、その死をもつて完成するわけだが、『渋江抽斎』出発に際して据え得ていた五百像は、まだまだ片影でしかなかった。しかし、それだけでも、ある程度のイメージ形成には事足りたろうし、同時にまた、全体像ではなかったそれだけに、その全体像完成への意欲が波打つのは自然であろう。そこにジェネアロジックへの端緒もあるだろうし、抽斎没後が書かれるべきものの、有力な、少くともひとつが内在していたのではなからうか。」(注9)と述べている。因に抽斎没後の遺族の動静を展望すると、

抽斎没後	章	立	年	代	備	考
1	56	2	安政5年			
2	67	70	6年			

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
100	99 ² / ₃	99 ¹ / ₂	98	98 ² / ₃	96 ² / ₃	93 ¹ / ₂	90	87 ¹ / ₂	85 ¹ / ₂	79 ¹ / ₂	79 ¹ / ₂	77 ³ / ₄	77 ¹ / ₂	77 ¹ / ₃	77	73	71
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
100 ¹ / ₃	99	99 ² / ₃	99 ¹ / ₂	98	98 ² / ₃	96 ² / ₃	93 ¹ / ₂	89	87 ¹ / ₂	85 ¹ / ₂	79 ¹ / ₂	79 ² / ₃	77 ³ / ₄	77 ¹ / ₃	77 ¹ / ₃	76	72
11年	10年	9年	8年	7年	6年	5年	4年	3年	2年	明治1年	3年	2年	慶応1年	元治1年	3年	2年	文久1年

鷗外出生

明治維新

五百弘前から東京へ

57	49 ? 56	41 ? 48	33 ? 40	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21
112	111 ^{1/2} ?	111 ?	110 ^{1/2} ?	110 ^{1/3} ?	110 ?	109 ^{1/2} ?	109 ^{1/3} ?	109 ?	108 ^{1/3} ?	105 ^{1/3} ?	104 ?	103 ?	101 ^{2/3} ?	101 ^{1/3} ?	100 ^{1/3} ?
119	111 ?	111 ^{1/2} ?	110 ?	110 ^{1/2} ?	110 ^{1/3} ?	109 ?	109 ^{1/2} ?	109 ^{1/3} ?	108 ?	108 ^{1/3} ?	105 ^{1/3} ?	103 ?	102 ?	101 ^{2/3} ?	101 ^{1/2} ?
5年	341 444 年・大正2	3733 3834 3935 4031 年	2824 2925 3026 3127 年	23年	22年	21年	20年	19年	18年	17年	16年	15年	14年	13年	12年
注2 (58)	(50 ? 57)	注1 (42 ? 49)								五百の死					

注1 鷗外の錯簡がある。抽斎歿後40年は明治31年で正しい。但し明治32年の

鷗外・史伝小説論序説

記述がないため、それ以降の△抽斎歿後▽の年次は、1年づつ加算したものが正確な年次となる。
注2 112～119を詳細に見ると、112保の現在、113～119杵屋勝久（抽斎の四女陸、保の姉）の現在の叙述。

以上の如くなる。「明治維新」の年の記述が六章にわたっていて、一番長い。洪江家もこの時代の回天の渦巻きに巻込まれて行ったのである。今その有様を見ると、江戸を去って弘前藩へ出立するに際し、「抽斎父子の遺愛の木たる櫻柳」や「山内豊覚が遺言して五百に贈った石灯籠」を「棄て、去るに忍びなかつた」が、「一身の安きをだに期し難い乱世の旅」故、奈何ともしがたかつたこと、食客になっていた妙了尼の処遇に憂慮したこと、洪江家出入の職人・商人の懇願にもかかわらず、藩が許可しなかつたこと、道中誰何されたので、成善（保）を女装させたこと、仙台で路金が尽きたので、荷物の過半を売ったこと、宿で物を盗まれることが数度に及んだこと、若党の一人が他郷の出身である故追放された事等枚挙にいとまがない。しかしなんとと言っても、「知行は当分の内六分引を以て給すると云ふ達しがあつて、実は宿料食料の外何の給与もなかつた。これが後二年にして秩禄に大削減を加へられる発端であつた。」とある通り、経済変動は没落士族の家計に容赦なく、その圧力を加えて行つたのである。やがて「秩禄の大削減」に加えて、「医者等の降等が令せられ」、本来なら三百石であつた洪江氏は、中の上に位し、秩禄の削減で「大中士」八十俵となる筈であつたが、「成善は医者と看做されて降等に逢ひ、三十俵の禄を受くることとなり、剩へ士籍の外にありなごさへ云はれたのである。成善は抗告を試みたが、何の功をも奏せなかつた。」と言うのである。鷗外の目は、このように遺族達の△生活▽に注

がれている。しかも精一杯生きながら、歴史の波濤に翻弄され続ける彼等のあまり幸福だとは思われない姿を描き出している。現存している嗣子保に対して、その著わした書は「隨時世人を啓発した功はあるにしても、概皆時尚を追ふ書估の誅求に応じて筆を走らせたものである。保さんの精力は徒費せられたと謂はざることを得ない。そして保さんは自らこれを知つてゐる。」と言ひ、更に計画している書について、「保さんは果して能く其志を成すであらうか。世間は果して能く保さんをして其志を成さしむるであらうか。」とも言つてゐる。姉の陸は杵屋勝久と云つて、長唄の師匠をしている。陸と保との間の脩は亡くなったが、その子の終吉は凶案家となつてゐる。鷗外はさりげなく、「三軒の家は頗る生計の方向を殊にしてゐる。」と述べてゐる。けれども、生活の中に人間を見ようとしてゐる鷗外の目は、個人の力が時代の力の前に喘いでゐる実相を見逃しはしない。鷗外その人は、歴史というえたいの知れない力によつて翻弄され続ける個人の姿を見ている。その個人の恨みを呑み込んで、更に巨大になつて行く歴史の自然の猛威を見逃してはいない。

鷗外にとつて抽斎との出合ひは、「奇縁」であり、まさしく「邂逅」であつた。『武鑑』を蒐集してゐるうちに、「古武鑑に精通してゐる無名の人の著述が写本で伝わつてゐる事、その無名の人は自ら抽斎と稱している事、其写本に弘前の渋江と云ふ人の印がある事、抽斎と、渋江とが若しや同人ではあるまいか」と思ひ、尋ね歩くうち、「抽斎と云ふのは経籍訪古志を書いた渋江道純の号」である事を知り、更に遺族の現存してゐる事も知るのである。鷗外は次の様に語つてゐる。

抽斎は曾てわたくしと同じ道を歩いた人である。しかし其健脚はわ

たくしの比ではなかつた。迥にわたくしに優つた抽斎の具を有してゐた。抽斎はわたくしのために畏敬すべき人である。然るに奇とすべきは、其人が康衢通達をばかり歩いてゐるに、往々徑に由つて行くことをもしたと云ふ事である。抽斎は宋槧の經子を討めたばかりでなく、古い武鑑や江戸図をも翫んだ。若し抽斎がわたくしのコンタンポランであつたなら、二人の袖は横町の溝板の上で摩擦合つた筈である。そして、抽斎追求の過程で、師、先輩、知友の叙述となるのである。鷗外は当時の「学問芸術界の列宿」と言ひ、抽斎の「大己」とも言つてゐる。具体的に見ると、

十三章 抽斎の師 市野迷庵、狩谷枝斎（經学）

十四章 “ 伊沢蘭軒（医学）

十五章 “ 池田京水（医学）

二十章 抽斎の先輩 安積良斎、小嶋成斎（儒者又は国学者）

二十一章 “ 岡本況斎、海保漁村（儒者又は国学者）

多紀薩庭、伊沢榛軒（医学）

谷文晁（芸術家及芸術批評家）

二十二章 “ 寿阿弥（芸術家及芸術批評家）

二十四章 抽斎の知友 石塚豊芥子（芸術家及芸術批評家）

森根園（抽斎の門弟）

となり、やがて、この中から『伊沢蘭軒』が生まれて来るのである。抽斎は蘭軒を生み、蘭軒は霞亭を生みという具合に、鷗外正系の伝記文学の誕生となる事に注目したい。

次に伊沢蘭軒伝を構築するにあたって、鷗外の当惑は「渋江氏には『泰

平千代鑑』と題するクロオニツクがあつたが、「伊沢氏には編年の記載が少いと云ふ」事実面に直面したことである。そこで鷗外は、

根本材料は伊沢徳さんの蘭軒略伝乃至歴世略伝に拠るとする。……

しかし其材料の扱方に於て、素人歴史家にたるわたくしは我儘勝手な道を行くことゝする。……これを無態度の態度と謂ふ。(傍点筆者)

と立伝の態度を決めている。伊沢蘭軒を主軸に、頼山陽、狩谷掖斎、菅茶山、池田京水等の生活圏を絡ませながら蘭軒像を補綴している。そして、近世考証学者の系譜並びに同時代の文化史を、時間的、空間的展望の中に「一の浮泛の字句なき」ステックな文体を以て位置付けている。作品の構成を見ると、

一 蘭軒事蹟埋没の一面

一八七 蘭軒の死

二六一 榛軒の死

三二一 柏軒の死

三六七 棠軒の死

三七一 歴史を排斥する時代傾向

全三七一章を以て完結している。ここでも蘭軒没後の遺族達や、山陽、掖斎、茶山、京水の末裔等の動静に比重が掛けられている。「無態度の態度」を以てする鷗外の方法は、『渋江抽斎』の時と同様に、「蘭軒が泉豊洲の門下にあつた時、同窓の友には狩谷掖斎、木村文河、植村士明、下条寿仙、春泰の兄弟、横山辰弥等があつた。」と記した後、初めて逢着した木村文河以下の人々の名、字、号、身分、その人の業績等を略記する事を怠つてはいない。

次に渋江抽斎没後の叙述は、「抽斎没後の第九年は慶応三年である。」と云う書き出しで初まり、編年式に構成されているのに対して、『伊沢蘭軒』では、起筆はほぼ同様であるが、その年の末を、

此年文政十二年(蘭軒歿す。注記筆者)に、頼氏では山陽が五十になり、其母梅颯が七十になつた。……伊沢氏では此年榛軒が既に云つた如く二十六、弟柏軒が二十、妹長が十六になつてゐた。榛軒の妻勇は其齒を詳にしない。蘭軒の姉正宗院幾勢は五十九であつた。

と結ぶのを常としている。蘭軒に交わつた人達の動静と、(かならずしも編年体になつていない。)蘭軒の遺族の年令とを記している。蘭軒の事蹟を叙して其の子孫に及び、現存せる後裔を数え、一卷を終ろうとする時、鷗外自から「伝記の客観叙法」(三六九)、「立伝付載系族」(三七〇)、「歴史を排斥する時代傾向」(三七二)の三章を以て、(注10)巻を閉じている。すなわち、

わたくしは筆を行ふに當つて事実を伝ふことを専にし、努て叙事の想像に涉ることを避けた。客観の上に立脚することを欲して、復主観を縦まゝにすることを欲せなかつた。その或は体例に背きたるが如き迹あるものは、事実欠陥あるが故に想像を藉りて補填し、客観の及ばざる所あるが故に主観を借つて充足したに過ぎない。と言ひ、更に

前代の父祖の事蹟に、早く既に其子孫の事蹟の織り交ぜられてゐるのを見、其糸を断つことをなさずして、組織の全体を保存せむと欲し、叙事を継続して同世の状態に及ぶのである。

と述べている。この文は『伊沢蘭軒』の方法に関する自註である。そして

て、『伊沢蘭軒』で描きたかったのは、「抽斎はわたくしの偶邂逅した人物である。此人物は学界の等閑視する所でありながら、わたくしに感動を与ふることが頗る大であつた。蘭軒は抽斎の師である。抽斎よりして、蘭軒に及んだのは、流に溯つて源を討ね」（傍点筆者）、近世考証学者の事蹟と生活を系譜的に溯る事であつた。そして、それが全円的に完結を見ると、近世文人の一大交遊史となり、生活史ともなる筈である。すなわち、ここに特異な文化史が形成されることになる筈であつた。しかしながら、純客観的な態度を取る限り、史料の重さ故でなく、史料の乏しき故に、凝縮度に欠ける所があるのも事実である。その試みの見取図は看取されるが、言つて見れば、本紀と列伝との間に間隙があつて、しつくりしない所が残つていても言えようか。

更に北条霞亭は『伊沢蘭軒』の「その七十九」の菅茶山の書牘中に見える人物である。蘭軒伝では霞亭を中心とした文が、七九章に初まり、一一九―一二三章、一三七―一五〇章、一五七章、一六一章、一六二章に及んでいる。鷗外は『北条霞亭』の冒頭で、「わたくしは伊沢蘭軒を伝えるに當つて、筆を行る間に料らずも北条霞亭に逢著した。」と述べ、「文中わたくしに興味を覚えしめたのは、主として霞亭の嵯峨生活である。霞亭は学成りて未だ仕へざる三十二歳の時、弟碧山一人を挈して嵯峨に棲み、其状隱逸伝中の人に似てゐた。わたくしは嘗て少うして大学を出でた比、此の如き夢の胸裡に往來したことがある。」と告白している。抽斎追求の燃焼度とは比すべくもないが、共感と興味が横溢している。そして「霞亭は何者ぞ」という疑問は、たまたま的矢書牘二百余通（大半が父適齋、弟碧山宛）との遭遇に出会い、霞亭の生涯に筆が及ん

で行くのである。書牘の判読し難き文字を読み、年月の不詳のものは内容から判断し、年代順に並べ替え、これらの材料によつて霞亭伝を構築して行くのである。鷗外は「霞亭の祖先より、霞亭自己の生涯を経て、其後裔に至るまで、極て簡潔に叙述しよう」と試み、「若し其文字の間に、彷彿として霞亭の陽城に私淑した所以が看取せられたらなら、わたくしの願は足るであろう。」と述べている。大正六年十一月五日の日記に「浜野知三郎、芥川竜之介来話」とあり、その日の印象を芥川竜之介は次の様に語っている。（注11）

僕はいつか森先生の書齋に和服を着た先生と話してゐた。方丈の室に近い書齋の隅には新しい薄縁りが一枚あり、その上には虫干しでも始まつたやうに古手紙が何本も並んでゐた。先生は僕にかう云つた。――「この間柴野栗山(?)の手紙を集めて本に出した人が来たから、僕はあの本はよく出来てゐる。唯手紙が年代順に並べてないのは惜しいと云つた。するとその人は日本の手紙は生憎月日しか書いてないから、年代順に並べることは到底出来ない」と返事をした。それから僕はこの古手紙を指さし、ここに北条霞亭の手紙が何十本かある。しかも皆年代順に並んでゐると云つた。――僕はその時の先生の昂然としてゐたのを覚えてゐる。

まさしく、鷗外が『北条霞亭』を執筆している時の事である。ただ方法論から見れば、抽斎や蘭軒の追求の仕方とは異つている。抽斎を叙しつつも、保、陸が、蘭軒を叙しつつも、徳が、それぞれ濃淡はあつても、形影相伴う姿が読み取れる。しかるに霞亭にあつてはそれが無い。次に霞亭に配する菅茶山、頼山陽、山口凹巷等が出て来るが、『伊沢蘭軒』

のように横に拡がらない。ただ渋川驍氏も言っている如く、菅茶山、頼山陽の姿は、「霞亭の俗物性が目にたつにしたがって、かえって、案外軽視できない美点を持った人物である。」(注12)事がわかってくる点に注意したい。更に遺族よりも、霞亭その人に比重がかかっている。なんとも云っても、嵯峨の隠棲に憧れていた所為であろうか。それ故に、『伊沢蘭軒』の如く横に拡がらないかわりに一種の成熟を持ち得たのである。

「霞亭は何者ぞ」という発問は、「霞亭は恐らくはアリストクラチックな人であつたゞらう」と云い、更に「霞亭は大志ある人物であつた。」と書いている。『伊沢蘭軒』の中でも「必ずしも山陽茶山の下には居らぬ」人物だろうと推測している。しかし、叙々に鷗外の思惑は外れで行くのである。善良ではあるがその俗なる所が目立って来る。楠公を詠んだ自詩を楠公碑として建立することを考え、田内月堂を介して、白河楽翁の題額を獲ようとした事などその例である。嵯峨に隠棲しつつも、内心には出世欲がくすぶっていた事も事実である。鷗外は巻を閉じるにあたって、遂に「儒林に入るとしても、文苑に入るとしても、あまり高い位置をば占め得ぬ人であらう」と断定せざるを得なくなつて来るのである。初めの期待は、こうして裏切られて行つたのである。鷗外の筆は、「従ひ霞亭の北遊と幽棲とに些のポオズに似たる処があつたとしても、固よりこれが累となすには足りない」と弁護していたが、やがて、その人俗なる部分突き放し、冷静にみつめている点で、客観性を獲得し得たのである。その点では、『伊沢蘭軒』より凝縮度は高いと言えるよう。

では、一体何故に期待を裏切つて行く霞亭を、描き切つたのであろうか。第一に考えられる事は、霞亭の「嵯峨の隠逸生活」に対する憧憬が強かつたのではなからうか。次に「わたくしは年次なき我国の古人の書牘を読む法を講じてゐるのである。そしてその講究のメカニズムの一隅を暴露して人の観るに任ずるのである」と自負する自然科学的思考法や、何事も途中で放擲しない鷗外の性情が考えられる。吉田精一氏は、「彼が考証を以て純粹な学問とし、正学一派のための校刻の業を尊重したことは、自然、才よりも、学、識に敬意を払い、ジャーナリスト山陽をしりぞけて、抽齋、蘭軒、霞亭等に好意を示すことになつたのである。」(注13)と述べている。概ね賛成であるが、霞亭の俗なる部分が色濃くなり出すと、山陽や茶山の良さが対照的に描かれている事実を踏えるならば、「ジャーナリスト山陽」を嫌つた事が、直に「霞亭等に好意を示す」事になつたとは言い難い。むしろ、山陽や茶山の良さを越えて、なお霞亭の俗なる部分に固執している鷗外の内心こそ問題にすべき所であろう。私は、霞亭を通して、鷗外は自己の腑分けを、反撥と共感を以てなしている故に、俗なる部分から目を離す事が出来なかつたと考へる。渋川驍氏も、鷗外は、霞亭の俗物性に反撥を覚えながらも、その着々と自分の地位を築いてゆく、霞亭の姿に、自分の姿に相似たものを見ざるをえなかつたのではなからうか。しかも、霞亭の俗物性を剔抉してゆく過程において、また自分のなかに潜んでいる俗物性に、ときどき批判の眼を向けざるをえなかつたのではなからうか。それが鷗外をして、この長篇をなおざりにできない義務感を覚えさせ、それを完成させる意志を奮いたたせたのではないだろうか。(注14)と述べている。肯

つたが、鷗外自身ももし封建の世にあつたならば、抽斎、蘭軒等と同じく、医にしてまた藩の文学たり得たかも知れないという事情が、彼の興味を驅つて、彼等の生活をこまかにさぐらせたのではあるまいか。別の意味ではそれは、彼の父の時代、もしくは祖父の生活を、より理想化され、拡大された環境に置いて知ることであつた。その点ではこれらの史伝は藤村の『夜明け前』などと、必ずしも性質を全く異にしたものではなかつた。」(注16)と述べている。鋭い見解である。その意味では、『夜明け前』を始めとして、田山花袋の『時は過ぎゆく』、本庄陸男の『石狩は懐く』から『石狩川』へと続く作品と同質であると云えよう。維新の回天の中で、翻弄されながら生きて行つた没落士族の歴史を描き出している。それは、とりもなおさず、鷗外の自己の血脈を探る心情と深いつながりを持っていたのである。

ところで、鷗外はこの伝記を描くにあたって、どのような方法を用いたのであろうか。史伝小説の方法は、『津下四郎左衛門』にその萌芽を見、『渋江抽斎』に於いて、家族の形成する生活圏と他のそれとの連鎖の中で描くという集約的方法を完成している。しかし、すでに論じた如く、『渋江抽斎』、『伊沢蘭軒』、『北条霞亭』では、少しづつその方法は異っている。おそらく、鷗外の理想とした方法は、家族の形成する生活圏を他のそれとを編年式に同時代史を平面として、その遺族達の生活史を交叉させて、編年式に追う事であつたろう。『伊沢蘭軒』でそれを試みながら、山陽、茶山、京水等はかならずしも編年式になっていない事は、すでに述べた通りである。そのような欠陥もあるが、史伝様式の実験的方法論は評価すべきであらう。そして、個々の作品に於いて評価を

下すよりも、連作として把え、個々の伝記が集合化されて、始めて史伝様式の完成へと向かつたと見るべきであらう。厳密に云えば、史伝様式は様々なスタイルを包括しつつ、まだ未成であつたと言えよう。主題と方法と作家の内心とが絡みあつて、文学的凝縮度としては『渋江抽斎』に優るものはなからう。そして、『伊沢蘭軒』の方法論の実験は評価出来るが、やはり、『北条霞亭』の方が秀れている事は否めない。岩上順一氏の言葉を借りて云えば、(注17)『渋江抽斎』、『北条霞亭』は史伝的小説Vであり、『伊沢蘭軒』は史伝的物語Vであると言えるのではなからうか。

鷗外は『なかじぎり』の中で、「経歴と遭遇とが人のために伝記を作らしむに至つた。そして其体裁をして荒涼なるジエネアロジックの方向を取らしめたのは、或は彼のゾラにルゴン・マカアルの血統を追尋させた自然科学の余勢でもあらうか。」と言いながら、それも理由の一部に過ぎないと言つている。そして、「趙翼は魏収を刺つて『代人作家譜』と云つた。しかしわたくしの伝記を作るのと、支那人が史を修めたのは、其動機に同じからざるものがあるかとおもふ。碑文に漢文体を用ゐるのも、亦形式未成の故である。」と言つている。更に、方法に於いて注意すべき事は、その執筆モチーフに胚胎している。すなわち、『観潮楼閑話』の中で、「わたくしは或時ふと武鑑を集め始めた。そして昔武鑑を集めて研究した人に渋江抽斎のあることを知つた。それから抽斎が昔に武鑑を集めたのみでなく、あらゆる古本を集めて研究したことを知つた。それからその師友に狩谷掖斎があり、伊沢蘭軒があり、小嶋宝素があり、森枳園があることを知つた。わたくしは此人々の事蹟が、掖斎

を除く外、殆ど世に知られてゐぬことを知つた。そしてふとその伝記を書き始めたのである。」と語っている。すなわち、『抽斎抽斎』の中でその師伊沢蘭軒についてふれた部分が核となり、次に『伊沢蘭軒』が生まれ、その中の北条霞亭が次作になると云うように、連作体をなしている。私はこの方法こそ、鷗外が親しんだ中国文学の方法の影響を受けているように思う。私はこれを「連環体小説」と見たい。そして、個々の作品が全体的に集約されて、始めて史伝小説が完成するのである。鷗外の史伝小説は、この方法を以て描かれているのである。

このように「邂逅」から「逢着」を重さね、ジェネアロジックに史伝小説を描き切った時、鷗外は何を發見し、それが晩年の人生とどう関わってくるのであろうか。私はすでに同時代史のみならず、遺族達の生活を描き出した事を述べた。今、『伊沢蘭軒』の「その三百六十八」に於いて、「わたくしは蘭軒歿後の事を叙して養孫棠軒の歿した明治乙亥の年に至つた。所謂伊沢分家は今の主人徳さんの世となつたのである。以下今に迫るまでの家族の婚嫁生歿を列記して以て此稿を畢らうとおもふ。」と述べて、以下列記している。それは、まさに「点鬼簿」でもある。

更に伊沢家と関連のあった人々に対して、「此間明治十年に池田氏で京水の三男生田玄俊、小字桓三郎が摂津国伊丹に歿し、十三年に小嶋氏で春澳瞻淇が歿し、十四年に池田氏で初代全安が歿し、十八年に森氏で枳園が歿し、又石川氏で貞白が歿し、三十一年に小嶋氏で春沂未亡人が歿し、三十三年に狩谷氏で既記の如く矩之が歿した。」と記している。すでに『渋江抽斎』の維新前後の生活と合せ見るならば、維新という変革期の中で、もはや至福に生きえない没落士族の家族の姿が彷彿としてく

る。伊藤發子氏は「歴史を探究すればする程、自然の意志と人間の自由との間に越ゆべからざる断崖のあることを認識せざるを得なくなる。」(注18)と述べている。ここに至って、鷗外の目は、人間の力ではどうにもならない歴史の猛威を見定めている。人間の生死の様を喜怒哀楽を抑制しつつ、その事実のみを点綴している。

このように自然の歴史の力の前に、脆くも潰れて行く人間の歴史のかなしみを静かに看取している鷗外は、その晩年の生とどう関わっているのであろうか。鷗外は『伊沢蘭軒』の末に「わたくしの伝記が客観に立脚したこと、系族を沿討したとの二方面は、必ずしも其成功不成功を問はず、又必ずしも其有用無用を問はない。」と言ひ。「わたくしの渋江抽斎、伊沢蘭軒等を伝したのが、常識なきの致す所だと云ふことは、必ずや彼書牘の言の如くであらう。そしてわたくしは常識なきがために、初より読者の心理状態を閑却したのであらう。しかしわたくしは学殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない。」とも語っている。『観潮樓閑話』の中でも同主旨の事を言ひ、そして、「只書きたくて書いてゐる。」とさえ言っている。一見居直りとも云える心情の中に、何物にも妥協しない厳しさが込められている。『空車』(大五・七)に於いて、

わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へ、これを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これに繋いである馬は骨格が逞しく、栄養が好い。それが車に繋がれたのを忘れたやうに、緩やかに行く。馬の口を取つてゐる男は背の直い大男である。それが肥えた馬、大きい車の靈でもあるやう

に、大股に行く。此男は左顧右眄することをなさない。物に遇つて一步を緩くすることをなさず、一步を急にすることもなさない。旁若無人と云ふ語は此男のために作られたかと疑はれる。(傍点筆者)

と述べている。当時の鷗外の心情とほぼ一致するであろう。かつてのちっぽけな怨念や焦燥感は、自己の血脈の一部として史伝小説を追求して行くうちに、徐々に消滅し、やがて新しき生の誕生となるのである。

かつて、『青年』の主人公小泉純一をして、「生きる。生活する。答は簡単である。併し内容は簡単どころではない。一体日本人は生きるといふことを知つてゐるだろうか。」と内実のある生き方の欠如を歎いたり、『カズイスタカ』に於いて、「始終何か更にしたい事、する筈の事があつたやうに思つてゐる。併しそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。」と苛立を吐露している。四十年代の鷗外の心情は、かくの如く、生の欠如を歎き、日々の充足への願望の声でみちみちている。『妄想』に於いても、「自然科学のうちで最も自然科学らしい医学をしてゐて、exact な学問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られているやうに学問といふことに齷齪してゐる。」と語り、「足ることを」知らない「永遠なる不平家」とさえ言っている。このような荒廢した生の中であつて、孤絶でニヒルな心情は、人書くと云う行為の中で姿を変え続けて行くのである。(注19) 今、問題にしたいのは、『妄想』の主人公翁の目である。「最早幾何もなくなつてゐる生涯の残余を、見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死に

あこがれ」もしない翁は、時とすると、「爛々たる目が大きく睜られて遠い遠い海と空とに注がれてゐる。」のである。確かに翁の目は、遠い来來に何物をか望んでいる目であろう。翁は、目詰めている「海と空」に象徴される自然の残忍さに気が付いてはいなし、鷗外もその認識を実感として受け留めてはいない。それが具体的な形として形象化されて来るのは歴史小説であろう。武士社会の不条理故に人間の生が押し潰されて行く様が、『阿部一族』の場合如実に表わされている。しかし、鷗外は歴史の自然を実感として把えてはいるが、まだそれが自己の生にまで拡大されて来てはいない。それは、自己の血脈として、涉江抽斎以下の伝記を叙述しつつ、筆が遺族に迄及んで来るに従つて、歴史の自然を実感しつつ、自己の生と切り結んで来るのである。晩年の鷗外の史伝小説に対して、勝本精一郎氏は否定的な見解を示している。(注20) すなわち、

私は歴史其儘の歴史小説から歴史離れの作品の段階を通つて史伝物の新境地に出た鷗外の歩みに、正反合の形をとつた正常な文学史的発展の跡をみとめることが出来ない。「阿部一族」風な作品が「高瀬舟」風の作品の経験を十分に取り入れて次の段階のものに豊熟したという趣きを「涉江抽斎」に見ることは出来ない。鷗外の史伝物は決して、その前の段階の「正」と「反」と「合」と「合」たる特質は持つていない。……一見、歴史其儘主義の一層の徹底化が史伝物の上にある様に見えるが、しかしそれは発展・成熟の方向において徹底化したものではなく、……晩年のコースの屈折によつて、失われた文学とは、一体どんなものだったのであろうか。……私はそれは鷗外自身が訳したゲーテの

「フ、ア、ウ、ス、ト」の、よ、う、な、世、界、観、藝、術、の、達、成、が、挫、折、し、崩、解、し、失、わ、れ、た、
のであると思う。(傍点筆者)

と述べている。しかし、すでに考察して来た如く、史伝小説の世界が自
己の血脈から発想され、維新を境にもはや父や祖父の時代のように至福
に生きえない没落士族達の末裔の姿の中に人生生活Vを見詰めている。し
かも、歴史の自然の前に翻弄されて生きる人達を通して、もはや人間の
力がはとうにもならない、歴史の自然の力の巨大さを見逃してはいな
い。それは歴史小説で確認した歴史の必然性は、今や鷗外の生にまで影
を落していると言えるのである。その意味では勝本説を全面的に肯定す
るわけには行かない。今や人間の生を翻弄し続ける歴史の自然を傍観し
ている鷗外の心中はどんなものであったろうか。今や虚しい人間の営為
をへ虚Vと感じつつ、それをありのまま肯定して生きようとしている鷗
外の姿がある。それは、人生を虚しいと感じつつ、その虚しさのなかに
自己を賭けて生きて来た故に、到達しえた心境なのである。

(注)

- 1 「跡見学園女子大学紀要」(第四号、昭和四十六年三月十五日発行) 掲載
の拙稿『鷗外・『津下四郎左衛門』論考』、二四頁。
- 2 清田文武『鷗外『栗山大膳』をめぐる』(阿達義雄博士退宮記念「国語
国文学・国語教育論叢」、昭和四十六年六月二十日発行)、二九二頁。
- 3 唐木順三『森鷗外』(昭和三十三年三月三十日、社会思想研究会出版部発
行) 所収の『在野の一時期』―『渋江抽斎』その他―、一七三頁。
- 4 「解釈と鑑賞」(第二十五卷第十二号、昭和二十五年九月五日発行) 掲載
の平岡敏夫『歴史小説と史伝』、一〇四頁。
- 5 三好行雄『森鷗外』―近代文学注釈大系―(昭和四十一年一月二十日、有
精堂刊)の解説、三八五頁。
- 6 「鷗外」(2号、昭和四十一年三月三十一日発行) 収録の未発表賀古書簡

一〇三通、三四頁。

7 稲垣達郎編『森鷗外必携』(昭和四十三年二月十日、学燈社刊) 所収の重

松泰雄『榎原品』、一六八頁。

8 「民主文学」(NO83、昭和四十七年十月一日発行) 掲載の拙稿『森鷗外
論―孤絶からの出発』、一二四頁。

9 「国文学研究」(第四十三集、昭和四十五年後期号、昭和四十六年一月二
十五日発行) 掲載の稲垣達郎『抽斎歿後』、四一九頁。

10 第二次岩波版『鷗外全集』の第九巻の後記で、斎藤茂吉は「第八巻におい
てなした如く本文各章の略目を列記する。「その三百十三」以下は先生自
らの案に成つたものであり(但三百四十五、三百四十六、三百六十七欠)、
他は編輯者が作つたものである。」と、記している。

11 『芥川竜之介全集』(全二十巻、昭和二十九年一月、岩波書店刊) 第十二
巻所収の『文芸的な、余りに文芸的な』十三「森先生」、一二七頁。

12 渋川驍『森鷗外』―作家と作品―(昭和39年8月20日、筑摩書房刊) 所収
の『史伝小説』、二四〇頁。

13 『森鷗外全集』(全八巻、別巻一、筑摩版) 第六巻所収の吉田精一氏の解
説、三七三頁。

14 注12に同じ。但し、二三九頁。

15 生前の出版計画によると、伊沢蘭軒伝附小嶋宝素伝/渋江抽斎伝、一巻/
北条霞亭伝、一巻があったようだが、実際には、森林太郎創作集巻一『伊
沢蘭軒』(大一一・八・春陽堂刊)が出版されただけであった。

16 注13に同じ。但し第五巻所収の吉田精一氏の解説、五六九頁。

17 岩上順一『歴史文学論』(昭和十七年三月三十日、中央公論社刊) の中で
『渋江抽斎』をへ歴史的ロマンVと呼び、『伊沢蘭軒』をへ史伝的ロマ
ンVと呼んでいる。

18 「国文」(第十五号、昭和三十六年六月十日、お茶の水女子大発行) 掲載
の伊藤発子『森鷗外『伊沢蘭軒』―史伝様式の完成―』、一三三頁。

19 注8に同じ。

20 「文芸評論」(第一号、昭和二十三年十二月三十日発行) 掲載の勝本清一
郎『世界観芸術の屈折』、五九頁。

附記

本論考の(一)は『鷗外・史伝小説論序説』―『榎原品』を中心として―と題し
て、早稲田大学国文学会秋季大会(昭和四十七年十一月十二日、於早実高)
で発表したものを骨子とする。当日、竹盛天勇、清水茂、大屋幸世氏からの
質疑を踏えて、論を整理したものである。